花のき村と盗人たち

新美　南吉

一

むかし、花のき村に、五人組の盗人がやってきました。

それは、若竹が、あちこちの空に、かぼそく、ういういしい緑色の芽をのばしている初夏のひるで、松林では松蝉が、ジイジイジイイと鳴いていました。

盗人たちは、北から川にそってやってきました。花のき村の入口のあたりは、すかんぽやうまごやしの生えた緑の野原で、子どもや牛が遊んでおりました。これだけをみても、この村が平和な村であることが、盗人たちにはわかりました。そして、こんな村には、お金やいい着物を持った家があるにちがいないと、もう喜んだのでありました。

川は藪の下を流れ、そこにかかっている一つの水車をゴトンゴトンとまわして、村の奥深くはいっていきました。

藪のところまでくると、盗人のうちのかしらが、いいました。

「それでは、わしはこの藪のかげで待っているから、おまえらは、村のなかへはいっていって様子をみてこい。なにぶん、おまえらは盗人になったばかりだから、へまをしないように気をつけるんだぞ。金のありそうな家をみたら、そこの家のどの窓がやぶれそうか、そこの家に犬がいるかどうか、よっくしらべるのだぞ。いいか釜右エ門。」

「へえ。」

と釜右エ門が答えました。これは昨日まで旅あるきの釜師で、釜や茶釜をつくっていたのでありました。

「いいか、海老之丞。」

「へえ。」

と海老之丞が答えました。これは昨日まで錠前屋で、家々の

倉や長持などの錠をつくっていたのでありました。
「いいか角兵工。」
「へえ。」
とまだ少年の角兵工が答えました。これは越後からきた角兵工獅子で、昨日までは、家々の閾の外で、さか立ちしたり、とんぼがえりをうったりして、一文二文の銭をもらっていたのでありました。
「いいか鉋太郎。」
「へえ。」
と鉋太郎が答えました。これは、江戸からきた大工の息子で、昨日までは諸国のお寺や神社の門などのつくりをみてまわり、大工の修業していたのでありました。
「さあ、みんな、いけ。わしは親方だから、ここで一服すいながらまっている。」
そこで盗人の弟子たちが、釜右工門は釜師のふりをし、海老之丞は錠前屋のふりをし、角兵工は獅子まいのように笛をヒャラヒャラ鳴らし、鉋太郎は大工のふりをして、花のき村にはいりこんでいきました。
かしらは弟子どもがいってしまうと、どっかと川ばたの草の上に腰をおろし、弟子どもに話したとおり、たばこをスッパ、スッパとすいながら、盗人のような顔つきをしていました。これは、ずっとまえから火つけや盗人をしてきたほんとうの盗人でありました。
「わしも昨日までは、ひとりぼっちの盗人であったが、今日は、はじめて盗人の親方というものになってしまった。だが、親方になってみると、これはなかなかいいもんだわい。仕事は弟子どもがしてきてくれるから、こうしてねころんで待っておればいいわけである。」
とかしらは、することがないので、そんなつまらないひとりごとをいってみたりしていました。
やがて弟子の釜右工門がもどってきました。
「おかしら、おかしら。」
かしらは、ぴょこんとあざみの花のそばから体を起こしました。

「えいくそッ、びっくりした。おかしらなどとよぶんじゃねえ、魚の頭のように聞こえるじゃねえか。ただかしらといえ。」
盗人になりたての弟子は、
「まことにあいすみません。」
とあやまりました。
「どうだ、村の中の様子は。」
とかしらがききました。
「へえ、すばらしいですよ、かしら。ありました、ありました。」
「何が。」
「大きい家がありましてね、そこの飯炊釜は、まず三斗ぐらいはたける大釜でした。あれはえらい銭になります。それから、お寺につってあった鐘も、なかなか大きなもので、あれをつぶせば、まず茶釜が五十はできます。なあに、あっしの眼にくるいはありません。嘘だと思うなら、あっしがつくってみせましょう。」
「ばかばかしいことにいばるのはやめろ。」
とかしらは弟子をしかりつけました。
「きさまは、まだ釜師根性がぬけんからだめだ。そんな飯炊釜やつり鐘などばかりみてくるやつがあるか。それになんだ、その手に持っている、穴のあいた鍋は。」
「へえ、これは、その、ある家の前を通りますと、槇の木の生垣にこれがかけて干してありました。みるとこの、尻に穴があいていたのです。それをみたら、じぶんが盗人であることをついわすれてしまって、この鍋、二十文でなおしましょう、とそこのおかみさんにいってしまったのです。」
「なんというまぬけだ。じぶんのしょうばいは盗人だということをしっかり肚にいれておらんから、そんなことだ。」
と、かしらはかしららしく、弟子に教えました。そして、
「もういっぺん、村にもぐりこんで、しっかりみなおしてこい。」
と命じました。釜右工門は、穴のあいた鍋をぶらんぶらんとふりながら、また村にはいっていきました。
こんどは海老之丞がもどってきました。

「かしら、ここの村はこりゃだめですね。」
と海老之丞は力なくいいました。
「どうして。」
「どの倉にも、錠らしい錠は、ついておりません。子どもでもねじきれそうな錠が、ついておるだけです。あれじゃ、こっちのしょうばいにゃなりません。」
「こっちのしょうばいというのはなんだ。」
「へえ、……錠前……屋。」
「きさまもまだ根性がかわっておらんッ。」
とかしらはどなりつけました。
「へえ、あいすみません。」
「そういう村こそ、こっちのしょうばいになるじゃないかッ。倉があって、子どもでもねじきれそうな錠しかついておらんというほど、こっちのしょうばいに都合のよいことがあるか。まぬけめが。もういっぺん、みなおしてこい。」
「なるほどね。こういう村こそしょうばいになるのですね。」
と海老之丞は、感心しながら、また村にはいっていきました。

つぎにかえってきたのは、少年の角兵エでありました。角兵エは、笛をふきながらきたので、まだ藪の向こうで姿のみえないうちから、わかりました。
「いつまで、ヒャラヒャラと鳴らしておるのか。盗人はなるべく音をたてぬようにしておるものだ。」
とかしらはしかりました。角兵エはふくのをやめました。
「それで、きさまは何をみてきたのか。」
「川についてどんどんいきましたら、花菖蒲を庭いちめんにさかせた小さい家がありました。」
「うん、それから?」
「その家の軒下に、頭の毛も眉毛もあごひげもまっしろなじいさんがいました。」
「うん、そのじいさんが、小判の入った壺でも縁の下にかくしていそうな様子だったか。」
「そのおじいさんが竹笛をふいておりました。ちょっとした、つまらない竹笛だが、とてもええ音がしておりました。あんな、ふしぎに美しい音ははじめてききました。おれがききとれてい

たら、じいさんはにこにこしながら、三つ長い曲をきかしてくれました。おれは、お礼に、とんぼがえりを七へん、つづけざまにやってみせました。」

「やれやれだ。それから?」

「おれが、その笛はいい笛だといったら、笛竹の生えている竹藪を教えてくれました。そこの竹で作った笛だそうです。それで、おじいさんの教えてくれた竹藪へいってみました。ほんとうにええ笛竹が、何百すじも、すいすいと生えておりました。」

「むかし、竹の中から、金の光がさしたという話があるが、どうだ、小判でも落ちていたか。」

「それから、また川をどんどんくだっていくと小さい尼寺がありました。そこで花の撓がありました。お庭にいっぱい人がいて、おれの笛くらいの大きさのお釈迦さまに、あま茶の湯をかけておりました。おれもいっぱいかけて、それからいっぱい飲ましてもらってきました。茶わんがあるならかしらにも持ってきてあげましたのに。」

「やれやれ、何という罪のねえ盗人だ。そういう人ごみの中では、人のふところや袂に気をつけるものだ。とんまめが、もういっぺんきさまもやりなおしてこい。その笛はここへおいていけ。」

角兵エはしかられて、笛を草の中へおき、また村にはいっていきました。

おしまいに帰ってきたのは鉋太郎でした。

「ささまも、ろくなものはみてこなかったろう。」

と、きかないさきから、かしらがいいました。

「いや、金持がありました、金持が。」

と鉋太郎は声をはずませていいました。金持ときいて、かしらはにこにことしました。

「おお、金持か。」

「金持です、金持です。すばらしいりっぱな家でした。」

「うむ。」

「その座敷の天井ときたら、さつま杉の一枚板なんで、こんなのをみたら、うちの親父はどんなに喜ぶかも知れない、と思って、あっしはみとれていました。」

「へっ、おもしろくもねえ。それで、その天井をはずしてでもくる気かい。」

鉋太郎は、じぶんが盗人の弟子であったことを思い出しました。盗人の弟子としては、あまり気がきかなかったことがわかり、鉋太郎はバツのわるい顔をしてうつむいてしまいました。

そこで鉋太郎も、もういちどやりなおしに村にはいっていきました。

「やれやれだ。」

と、ひとりになったかしらは、草の中へあおむけにひっくりかえっていいました。

「盗人のかしらというのもあんがい楽なしょうばいではないて。」

二

とつぜん、

「ぬすとだッ。」

「ぬすとだッ。」

「そら、やっちまえッ。」

という、おおぜいの子どもの声がしました。子どもの声でも、こういうことを聞いては、盗人としてびっくりしないわけにはいかないので、かしらはひょこんととびあがりました。そして、川にとびこんで向こう岸へ逃げようか、藪の中にもぐりこんで、姿をくらまそうか、と、とっさのあいだに考えたのであります。

しかし子どもたちは、縄切(なわきれ)や、おもちゃの十手をふりまわしながら、あちらへ走っていきました。子どもたちは盗人ごっこをしていたのでした。

「なんだ、子どもたちの遊びごとか。」

とかしらははりあいがぬけていいました。

「遊びごとにしても、盗人ごっことはよくない遊びだ。いまどきの子どもはろくなことをしなくなった。あれじゃ、さきが思いやられる。」

じぶんが盗人のくせに、かしらはそんなひとりごとをいいながら、また草の中にねころがろうとしたのでありました。そのときうしろから、

「おじさん。」

と声をかけられました。ふりかえってみると、七歳くらいの、かわいらしい男の子が牛の仔をつれて立っていました。顔だちの品のいいところや、手足の白いところをみると、百姓の子どもとは思われません。旦那衆の坊ちゃんが、下男について野あそびにきて、下男にせがんで仔牛を持たせてもらったのかもしれません。だがおかしいのは、遠くへでもいく人のように、白い小さい足に、小さい草鞋をはいていることでした。

「この牛、持っていてね。」

かしらが何もいわないさきに、子どもはそういって、ついとそばにきて、赤い手綱をかしらの手にあずけました。

かしらはそこで、何かいおうとして口をもぐもぐやりましたが、まだいい出さないうちに子どもは、あちらの子どもたちのあとを追って走っていってしまいました。あの子どもたちの仲間になるために、この草鞋をはいた子どもはあとをもみずにいってしまいました。

ぼけんとしているあいだに牛の仔を持たされてしまったかしらは、くッくッと笑いながら牛の仔をみました。

たいてい牛の仔というものは、そこらをぴょんぴょんはねまわって、持っているのがやっかいなものですが、この牛の仔はまたたいそうおとなしく、ぬれたうるんだ大きな眼をしばたたきながら、かしらのそばに無心に立っているのでした。

「くッくッくッ。」

とかしらは、笑いが腹の中からこみあげてくるのが、とまりませんでした。

「これで弟子たちに自慢ができるて。きさまたちがばかづらさげて、村の中をあるいているあいだに、わしはもう牛の仔をいっぴきぬすんだ、といって。」

そしてまた、くッくッくッと笑いました。あんまり笑ったので、こんどは涙が出てきました。

「ああ、おかしい。あんまり笑ったんで涙が出てきやがった。」

ところが、その涙が、流れて流れてとまらないのでありました。

「いや、はや、これはどうしたことだい、わしが涙を流すなんて、これじゃ、まるでないてるのと同じじゃないか。」

そうです。ほんとうに、盗人のかしらはないていたのであります。――かしらは嬉しかったのです。じぶんはいままで、人から冷たい眼でばかりみられてきました。じぶんが通ると、人びとはそら変なやつがきたといわんばかりに、窓をしめたり、すだれをおろしたりしました。じぶんが声をかけると、笑いながら話しあっていた人たちも、きゅうに仕事のことを思い出したように向こうをむいてしまうのでありました。池の面に浮かんでいる鯉でさえも、じぶんが岸に立つと、がばッと体をひるがえしてしずんでいくのでありました。あるときさるまわしの背中に負われているさるに、柿の実をくれてやったら、一口もたべずに地べたにすててしまいました。みんながじぶんをきらっていたのです。みんながじぶんを信用してはくれなかったのです。ところが、この草鞋をはいた子どもは、盗人であるじぶんに牛の仔をあずけてくれました。じぶんをいい人間であると思ってくれたのでした。またこの仔牛も、じぶんをちっともいやがらず、おとなしくしております。じぶんが母牛ででもあるかのように、そばにすりよっています。子どもも仔牛も、じぶんを信用しているのです。こんなことは、盗人のじぶんには、はじめてのことであります。人に信用されるというのは、なんというれしいことでありましょう。……

そこで、かしらはいま、美しい心になっているのでありました。子どものころにはそういう心になったことがありましたが、あれから長いあいだ、わるいきたない心でずっといたのです。久しぶりでかしらは美しい心になりました。これはちょうど、あかまみれのきたない着物を、きゅうに晴着にきせかえられたように、奇妙なぐあいでありました。

――かしらの眼から涙が流れてとまらないのはそういうわけなのでした。

やがて夕方になりました。松蝉は鳴きやみました。村からは白い夕もやがひっそりと流れだして、野の上にひろがっていき

ました。子どもたちは遠くへいき、「もういいかい」「まあだだよ」という声が、ほかのもの音とまじりあって、ききわけにくくなりました。

かしらは、もうあの子どもが帰ってくるじぶんだと思って待っていました。あの子どもがきたら、「おいしょ。」と、盗人と思われぬよう、こころよく仔牛をかえしてやろう、と考えていました。

だが、子どもたちの声は、村の中へ消えていってしまいました。草鞋の子どもは帰ってきませんでした。村の上にかかっていた月が、かがみ職人（しょくにん）のみがいたばかりの鏡のように、ひかりはじめました。あちらの森でふくろうが、二声ずつくぎって鳴きはじめました。

仔牛はお腹（なか）がすいてきたのか、からだをかしらにすりよせました。

「だって、しようがねえよ。わしからは乳は出ねえよ。」

そういってかしらは、仔牛のぶちの背中をなでていました。

まだ眼から涙が出ていました。

そこへ四人の弟子がいっしょに帰ってきました。

三

「かしら、ただいまもどりました。おや、この仔牛はどうしたのですか。ははア、やっぱりかしらはただの盗人じゃない。おれたちが村をさぐりにいっていたあいだに、もうひと仕事しちゃったのだね。」

釜右工門が仔牛をみていいました。かしらは涙にぬれた顔をみられまいとして横をむいたまま、

「うむ、そういってきさまたちに自慢しようと思っていたんだが、じつはそうじゃねえのだ。これにはわけがあるのだ。」

といいました。

「おや、かしら、涙……じゃございませんか。」

と海老之丞が声を落としてききました。

「この、涙てものは、出はじめると出るもんだな。」

といって、かしらは袖で眼をこすりました。
「かしら、喜んでくだせえ、こんどこそは、おれたち四人、しっかり盗人根性になってさぐってまいりました。釜右工門は金の茶釜のある家を五軒みとどけますし、海老之丞は、五つの土蔵の錠をよくしらべて、曲がった釘一本であけられることをたしかめますし、大工のあっしは、この鋸でなんなく切れる家尻を五つみてきましたし、角兵工は角兵工でまた、足駄ばきでとびこえられる塀を五つみてきました。かしら、おれたちはほめていただきとうございます。」
と鉋太郎が意気ごんでいいました。しかしかしらは、それに答えないで、
「わしはこの仔牛をあずけられたのだ。ところが、いまだに、とりにこないのでよわっているところだ。すまねえが、おまえら、手わけして、あずけていった子どもをさがしてくれねえか。」
「かしら、あずかった仔牛をかえすのですか。」
と釜右工門が、のみこめないような顔でいいました。
「そうだ。」
「盗人でもそんなことをするのでごぜえますか。」
「それにはわけがあるのだ。これだけはかえすのだ。」
「かしら、もっとしっかり盗人根性になってくだせえよ。」
と鉋太郎がいいました。
かしらは苦笑いしながら、弟子たちにわけをこまかく話してきかせました。わけをきいてみれば、みんなにはかしらの心持ちがよくわかりました。
そこで弟子たちは、こんどは子どもをさがしにいくことになりました。
「草鞋をはいた、かわいらしい、七つぐれえの男坊主なんですね。」
とねんをおして、四人の弟子はちっていきました。かしらも、もうじっとしておれなくて、仔牛をひきながら、さがしにいきました。
月のあかりに、野茨とうつぎの白い花がほのかにみえている村の夜を、五人のおとなの盗人が、一ぴきの仔牛をひきなが

ら、子どもをさがして歩いていくのでありました。
かくれんぼのつづきで、まだあの子どもがどこかにかくれているかもしれないというので、盗人たちは、みみずの鳴いている辻堂の縁の下や柿の木の上や、物置の中や、いいにおいのするみかんの木のかげをさがしてみたのでした。人にきいてもみたのでした。
しかし、ついにあの子どもはみあたりませんでした。百姓たちはちょうちんに火を入れてきて、仔牛をてらしてみたのですが、こんな仔牛はこのあたりではみたことがないというのでした。
「かしら、こりゃ夜っぴてさがしてもむだらしい、もうよしましょう。」
と海老之丞がくたびれたように、道ばたの石に腰をおろしていいました。
「いや、どうしてもさがし出して、あの子どもにかえしたいのだ。」
とかしらはききませんでした。
「もう、てだてがありませんよ。ただひとつのこっているてだては、村役人のところへうったえることだが、かしらもまさかあそこへはいきたくないでしょう。」
と釜右エ門が言いました。村役人というのは、いまでいえば駐在巡査のようなものであります。
「うむ、そうか。」
とかしらは考えこみました。そしてしばらく仔牛の頭をなでていましたが、やがて、
「じゃ、そこへいこう。」
といいました。そしてもう歩きだしました。弟子たちはびっくりしましたが、ついていくよりしかたがありませんでした。
たずねて村役人の家へいくと、あらわれたのは、鼻の先に落ちかかるように眼鏡をかけた老人でしたので、盗人たちはまず安心しました。これなら、いざというときに、つきとばしてにげてしまえばいいと思ったからであります。
かしらが、子どものことを話して、
「わしら、その子どもを見失って困っております。」

といいました。
老人は五人の顔をみまわして、
「いっこう、このあたりでみうけぬ人ばかりだが、どちらからまいった。」
とききました。
「わしら、江戸から西の方へいくものです。」
「まさか盗人ではあるまいの。」
「いや、とんでもない。わしらはみな旅の職人です。釜師や大工や錠前屋などです。」
とかしらはあわてていいました。
「うむ、いや、変なことをいってすまなかった。お前たちは盗人ではない。盗人が物をかえすわけがないでの。盗人なら、物をあずかれば、これさいわいとくすねていってしまうはずだ。いや、せっかくよい心で、そうしてとどけにきたのを、変なことを申してすまなかった。いや、わしは役目がら、人を疑(うたが)うくせになっているのじゃ。人をみさえすれば、こいつ、かたりじゃないか、すりじゃないかと思うようなわけさ。ま、わるく思わないでくれ。」
と老人はいいわけをしてあやまりました。そして、仔牛はあずかっておくことにして、下男に物置の方へつれていかせました。
「旅で、みなさんおつかれじゃろ、わしはいまいい酒をひとびん西の館(やかた)の太郎(たろう)どんからもらったので、月をみながら縁側(えんがわ)でやろうとしていたのじゃ。いいとこへみなさんこられた。ひとつつきあいなされ。」
ひとのよい老人はそういって、五人の盗人を縁側につれていきました。
そこで酒をのみはじめましたが、五人の盗人とひとりの村役人はすっかり、くつろいで、十年もまえからの知りあいのように、ゆかいに笑ったり話したりしたのでありました。
するとまた、盗人のかしらはじぶんの眼が涙をこぼしていることに気がつきました。それをみた老人の役人は、
「おまえさんはなき上戸(じょうご)とみえる。わしは笑い上戸で、ないている人をみるとよけい笑えてくる。どうかわるく思わんでくだされや、笑うから。」

といって、口をあけて笑うのでした。
「いや、この、涙というやつは、まことにとめどなく出るものだね。」
とかしらは、眼をしばたきながらいいました。
それから五人の盗人は、お礼をいって村役人の家を出ました。門を出て、柿の木のそばまでくると、何か思い出したように、かしらが立ちどまりました。
「かしら、何かわすれものでもしましたか。」
と鉋太郎がききました。
「うむ、わすれもんがある。おまえらも、いっしょにもういっぺんこい。」
といって、かしらは弟子をつれて、また役人の家にはいっていきました。
「ご老人。」
とかしらは縁側に手をついていいました。
「なんだね、しんみりと。なき上戸のおくの手が出るかな。ははは。」
と老人は笑いました。
「わしらはじつは盗人です。わしがかしらでこれらは弟子です。」
それをきくと老人は眼をまるくしました。
「いや、びっくりなさるのはごもっともです。わしはこんなことを白状するつもりじゃありませんでした。しかしご老人が心のよいお方で、わしらをまっとうな人間のように信じていてくださるのをみては、わしはもうご老人をあざむいていることができなくなりました。」
そういって盗人のかしらはいままでしてきたわるいことをみな白状してしまいました。そしておしまいに、
「だが、これらは、昨日わしの弟子になったばかりで、まだ何もわるいことはしておりません。お慈悲で、どうぞ、これらだけはゆるしてやってください。」
といいました。
つぎの朝、花のき村から、釜師と錠前屋と大工と角兵衛獅子

とが、それぞれべつの方へ出ていきました。四人はうつむきがちに、歩いていきました。かれらはかしらのことを考えていました。よいかしらであったと思っておりました。よいかしらだから、最後にかしらが「盗人にはもうけっしてなるな。」といったことばを、守らなければならないと思っておりました。

角兵工は川のふちの草の中から笛をひろってヒャラヒャラと鳴らしていきました。

四

こうして五人の盗人は、改心したのでしたが、そのもとになったあの子どもはいったいだれだったのでしょう。花のき村の人びとは、村を盗人の難からすくってくれた、その子どもをさがしてみたのですが、けっきょくわからなくて、ついには、こういうことにきまりました、――それは、土橋のたもとにむかしからある小さい地蔵さんだろう。草鞋をはいていたというのがしょうこである。なぜなら、どういうわけか、この地蔵さんには村人たちがよく草鞋をあげるので、ちょうどその日も新しい小さい草鞋が地蔵さんの足もとにあげられてあったのである。――というのでした。

地蔵さんが草鞋をはいて歩いたというのはふしぎなことですが、世の中にはこれくらいのふしぎはあってもよいと思われます。それに、これはもうむかしのことなのですから、どうだって、いいわけです。でもこれがもしほんとうだったとすれば、花のき村の人びとがみな心のよい人びとだったので、地蔵さんが盗人からすくってくれたのです。そうならば、また、村というものは、心のよい人びとが住まねばならぬということにもなるのであります。

「花のき村と盗人たち」

※『新装版　新美南吉童話集３
花のき村と盗人たち』（2012 年
12 月 1 日、大日本図書株式会
社）所収の「花のき村と盗人た
ち」をもとに一部、漢字表記と
ルビを編集しました。